七部集大鏡

曠野并員外

三

曠野炭俵

荻員外

曠野

信濃何丸撰釋

序文の内いとゆふのいとにのすりなる心のたしの
あるこの物きこのふをとめて
愚考源氏に為しくてもなる物きこのそかけ
ろふのなるかるをたかの世に出そあり今まで自
然にあらハ家の美言なり
芭蕉法曰翁云ふ人の長ヶ分にして同し位の
句をよしと和りつるもあらむそまそよしと
和りつる句をよかるへからぬとおりに
句よりつ一し上果の句を心のとこのぬ故に

よりつぬと持一し津々浦々を境波濤のこ
きり黄ひなほめて句しをえるつゝりとて
いかて集といふへけむ我後見の集を我家の俳
諧の一体の濫にして我心に應をさるゝ句ハ一句
ものをれ曠世集に貞室宗因等の句をの
きゝかを我家の俳諧の体なるまハ之物けり
しきを俳諧の俚言なる故に文盲愚昧れ
ものゝ多く口なるまて自己に俳諧を知まりと
れりふものゝ多く出来侍らむ元俗の今日な
まハ何とかをむこのくいへとて他の人を推し
むるものをあられ我家の俳諧を説むをめこ究
のしこくちをうほしものに事明るまと曲翠に
語りのふなりと云々或書に翁の曰我俳諧の
為ときるを知て是を知ふとき訳を知るもの

なしと愚老れりへらく能雀舌の人れいふ不ふ
て能きなをとらこまりて能こなるといふめるを
甚しれひか言なり初心として他の句を批判
するは又斤たらいこき業にはまいそこ寄人の力
によりて求めのいるすもれかうるめん　既に宗
鑑の句を荊口と許云かしそこなひ世坡
の翁の句しの注の行面さる去来か詩鹿山
の附たるこをたゝぬ歎ひ浪化子かいさゝらん
れ翁の句を解しそてなひ夕靜や秋をれ句を秋
なるかと思ふの歎ひ言ふ支考も扇引さく
の句をさとるすのなるぬを皆是を人の智に
及ばさるの恵子にあらしや上是の峯さへく
れぬしまして後世の今に和いてたるや
是をしとなり花の吉野山

愚考佐川図喜六の峯の白雲をいふも交
なり此句古今の名吟なるを世の人口に有
て絶る故に名吟なるやと問ふ時に是ハしか
ぬなりなるといふて根元をたゝぬ言そうをそ
ゝまた支考か書るものに祖翁吉野にて句なれ
ゝ貞室の是をしによりてなり我兄実にき
をかりてなるき時をこの柳下恵か詩をかねに
に似たれたとて彼名不に無季の格あるものを
れりひ出て頌書よりも軍書にかれ吉野山
此支考かいふ是をしハ一句れ恵名にして是ハ
しかゝ五文字のみ廃かりまゝあらさる之柳比
山にて黄金地りまゝゆへに金峯山と名付く又金
の沛嶽とも云震旦より花来るゆへに飛来
峯とも云此山に鐘有林鐘といふ山と鐘と

列て雅なる読之叔社清見原天皇御製か
よしのをよしとよく見てよしといひしよしのよ
く見よよき人よきみ世心ある人は此御製に
まして行きてなるはまづ吉野に行て
よしのよく見むとのみ心かけて尚色か好なは
吉野見て花ぞその見所に侍りしさや花ぞさえて
士朗がかなにに花ぞとは見て吉野も見れ程に席か
ぬか句のなかに二日めに吉野をはなれてかな櫻かな
されば雅びかなに吉野山は唯大雲の如に座
まるものに美景のよしの山は大雲に降りかゝるき
てまた此の山を同前ともに記すのかし
皆彼御製によれかるへし叔も貞室の名
なれ詠も吉野はまむとすまし花ふうこし
花をよくまちてすれをよしのとも見るなにふ

の中に花とよしのを一日にいひ兄て花の
よきまに吉野山といひかけて花をさしとしとれり
洒落を尽しけるを識に末代の名吟なりと
流石の祖翁も云ましてね梅のあひしに丈よ
く貞室の腹に分入りなる祖師の大量いふべ
申しけれかし西行上人の沙汰なきてよりなき
きもて花に筆しき顔なり
・何なぞ花見る人の　長刀
補花曰道元禅師の歌にみ形とありて鉢
袈裟衣袋猶の皮花のさりに大太刀の鞘
此下のなをと流れけるにや
・峯の雲かしきを花とやまかりく
古蓮曰堀川百首に色かかりし識の雲やまかりし
なにしむもいはず櫻の四方の山の端

・下しの下の宿といはまむ花の宿
敬祐曰左傳曰師一宿爲舍再宿爲信過信爲
次元を俗に一夜泊りを上の客二夜泊りを
中の客三夜泊りを下れ客とす下しの下
とはまさに花の七日を泊りて心のこゝろを惜まむ也
・見上しか梵に成ぬ　花　れ　滝
莞示曰すくに粗越へき峯の高しに山わけ
法り雪も梵なりたり古歌を始りつし
・ちり　花　れ　酒　盗　人よし
愚考万葉にさかしきに梅のはなりけてなりにと
ちの斉ての後はちりぬとよりしその五にうつ
ろに花の新のちりゆくに盃をもてまてはえ
されは酒盗人よといつり心なりつし
・なりあひや　初　花よりの面志れ

愚考なりあひは俗に沙きなりといふ　偷安
と書にや
・橿の木の花にかゝりはぬすりこゝ
愚考橿の木は曠世集の撰者荷兮が堂号
をいふなり尾陽橿木堂主人と序に書
ありけれや
・目ならは紫山時鳥　初　鰹
愚考孟子曰口之於味也目之於色也耳之
於声也鼻之於臭也又新撰万葉に綿々
曠野策弥行目見山花耳聴鶯歌に五月
山卯花月夜時鳥きけともあらはし又別りし
ものは此旨は素堂が三浜切の名句なりを
は世の人口にあらはし
・云声なと詞のゆしや　杜宇

雨柳曰源三位於政一声をさゝめりに過て時雨雲
路ゆかりに老をさゝめりゆく
・杜鵑十日も早き夜毎夕
弁地曰壬生忠見いはりに嗚て行くらむ郭公
淀のわたりを夜深きに淀を時雨れ京
物なきを形り
・物に形しや今起て雪なく起す
愚考金紫集さよふけて床さゝめきりをもたゝ
こゝきす人はてにはさきく蓋かりをかに
・峠まて砂抱へて月見の姫
愚考定家卿いさらはなきはねのかりて関
すゑむすゝ此うへを月の入峯の侍ものも叶ひ
なむや浪化解に云此歌をいさらは雲見に
ふるに不まてと云自れ注に引て明るを淋

なるへし既に祖翁の自画賛にも蓑笠に
木履かけまて出立しこまるに不まての趣意
まて考合すへし
・名月や年に十二を省なり
古連曰八月十五日に新す紀納言十二旦中無勝
於此夕之好の意にや又続古今集天暦御製月
にとに見る月なきと今月のまよひの月に似る月
を形き
・名月や海もおりたれ山も見れ
漁村曰詞苑集に秋の夜の月に心のあくかれて
雲なに物を思ふ此なるのちの趣に似たり
・新たゝ夜足らぬかと見る月夜か
愚考十三夜を中右記云保延元年九月十
三日今宵雲淨明之寛平法皇明月無双之

中於信出と云々中右記の中御門右大臣藤
原宗忠公の家説なるまゝは磯磯天皇の御時のや
又曰建仁寺の三益和尚十三夜の詩の序文に
此夜既月ゆ延喜御時之と云々
・暮いかに月の事もなすし海の果
愚考朔日の月のゆ天文志曰月朔見東方曰
朒又謂之側匿白の意なれば東方に朒なるといへ
ともいかにそや月れ事もなしといふ歟なるに
・何ゆの見立ても似れ三日の月
敬称曰白瑞曰月の三日生明之名なり杜詩に新
月似磨鏡或は玉鉤彎月初月若月等の名
はなきともそまたらにまゝ似れとこ
・夕月夜新焼けしてたゝしまむ
愚考新撰萬葉にハ夕三里夜と出てユフツクヨ

と訓す日の月出て萬方まてに三里の名を
歩行すへきの名にや夕月日新月日すへて月
をツクと訓すなるひなりへし
・電れ日や秋既夜の新の色
これ角曰謡なく佻諧の源氏なりと其を一格意
としてれ百番のうちにて目に立初耳ちりきき
雲に起因中略十とをなすり此ことなく
云やみちりを新うし江口の里にて宗因やこれ
とかそれ方いかれひとしくまといふ名を所りて
これ実を捨きる不肌骨に入て侍れとも二ふひ
元有へきこ初もなりし所に天津にて二字いひ
出すとあり
・いさゆかむ雲なんにさしかゝ不まて
萬葉錄に云後にいさゝらんと思しまひ今のとこ

定家卿のいさゝかの歌を師とし自ら庶幾せし人
きこえけれとかや
・夜の雲花とちらせや山に枝折しらむ
愚考古今集にのりてけりは藤原のなにかしが杜荻
の枝もあやしよみかねる白露とりし歌の奪胎換骨
此法をもて詠まれし古歌充として格別なり
・二日ふつかなりとも惜し花の春
一書に八雲より友の来て酒宴し翁も不斗酔て
ほとゝぎす放歌に飲興して昼まで寝たる体を
ふみのありさまを学者閑楽のさまにて書く
ちらぬ下なりさめてたのしき花一樂か我が還を
見たりしなるによりし二日にらず二日なり
たもし暇をえたやし二日とてよりし花の春
まで出てあなたと凝滞するに心のかくと学者へ

し茶学紙にいふ二日にあてゝとすべきなるなきを
平目なるまじき二日にあらずとなく　一書に二日に
てあぬりをとしなの物語の中略くしと云て
愚考此てまた八丈二日なるは審なりて暇をえ
たる人のいやしめりをもしと詞を入て学
なるの続猿蓑に人の言葉このくにのそし
初嫌此てよもよと同し言葉にて人の気にあらく侍
ふういやしむまじかとぞ何はしと初嫌に挑
其の云をいひかにうりきるぞ翁の花の春
をなくひまにも師にてもあの運ひなる道
・松かさり伊勢が家買ふ人ぞ誰
愚考伊勢の海をも東洞院に住て亭家に住ひ
松かゝりを愛てよめる古今集にもある川
湖にあらぬ我宿の池にかゝりゆく　抱まちて寄なり

・欲ゟ否速発にあらはれ　青
齋堂曰家祇法師ゆし見といふものゝ形ニ新
来まして連歌の貝にあらされ是をなむ
俳諧発によりめと或人にいひ今まゝ元も敢
代我意を松浦ゟ磯のまし貝の尻もむすれ
斤れもひして　愚考魚肉曰脊菜蔬曰藪
廣白曰凡非穀而食物謂之藪
・このさり木にあらて年ゝ柏ゟ所
愚考史記曰松柏為百木長守門閭鎮を
松をいよしめて度年の青よりもてもやす我
柏をそまゝに矣このもりて逢元にゐる人もすと
いつ意形ゐつし莊子曰受於命天惟松柏
独也生冬夏青之又王荊公字説曰松
柏為群木長故松従公猶公也柏従白猶

伯也五雑俎曰松柏独以春抽新紫既長而後
葉黄落又曰秦皇封松於太夫又曰漢武帝
封柏於大将軍又唐武后封柏於太史
・元朝や何となるまゝと　匡　様
無味堂曰或物語に云手のくまゝ云の名残を
しきより初雲をなむまゝ　さらに様の
給逆様をまゝ心地をくまゝて　愚考山家
集何とかくまゝに所りぬと今日より心にかゝる
不よしの　山雲にあるり様の枝を何と所く
花なるまゝとも　むかしかれ此古欲元にて
花の雲とかゝ　いへても花も所く様なるまゝ
元様の待ゝ　松のひまて元朝の朝の字眼之
・ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
愚考白氏文集曰忽因時節警年幾四十

如今矢(メラワリナリ)一年此一年を二年に充形して有と
もしら
伊勢浦やに木引休むさ此妻
此味堂曰太神宮に造営の材木紀州熊野より出ると
小柑子栗やひろたむ松の門
愚考続日本紀曰聖武天皇神龜二年播
大直漢云より柑子の種を持ち伊勢相諸
に石の上にたしまうる水をせうかうし
ゆりの大さまて此相を摘むか
月花のたしめ此毘邑の木こりか
一書に月花の始とは年の始月の始日此始を
此流に出ると毘邑の木充るまは俗りよそは
月形花形といふ事侍りたくし四法は四季に表す
さか姫やふかいの面いかにしらむ

一書にふかいの面を能の面にて痩ひ居る面と
之井寺柏濤なるとふかけると面にさか姫のれ
まてのいうなしむといふ事 一書にふかい孫
治郎天見等の名なりて俗面と
初夷の目出度名なり 堅魚々
愚考堅魚てカツホ十、カツホー、にや鰹は北
条五代記云鰹鮹を毎年夜に至て西海より
東海一来る伊豆を横安房の浦に釣上る
件の鰹を勝負に一の法をとまてもやし
先に支度し詰侍戦場門出の酒肴にして鰹
を書と用ひしと
初夏や漢名の橋の今此さか
一書に「張まくら幾夜夏見て在所の漢名の
橋にかりかるのも」
愚考元慶八年漢名此

橋を造る長サ五十六丈又正儘秘云を江國桃
鼻湖といふ有て湖と湖との間にかゝりそる
其を演名の橋といふさきハ虎関禅師左湖
右湖同一碧と絶らるさるをこゝより埋の出て
そこなひ湖もさ船から入湖に成てそきハ口い
を白そ名のみさ白此意を絶て久しき演
名此橋を初夏に見しるのさめてそ始めたる
なきにそとくさり此橋夏に欲よ此を船らす
しとをり 秘学紙に或女房の夜江ち此子なる
人をかさらひてなりそるこの又同し家人をかさ
らひぬと守て恨みそきハそらるすく夏にて
見えてなむいふ歌にらかへ更をつおに此のこみかけ
て此下に演名のたしかしさりきや 初夏を年
の夜にいふくるをけふこされて 栄具に出せしこ

西上人年くまぬ夜まで来ぬること思ひ寐のま
さしく見えて、の所に初夏此所初夏の始こ
・志清やたつ臣階にそこに此夏厚し
一書に田舎の産神語に夏志らけるし散
米にすらさ志らけの厚くまき出ること云て
・己の年や 昔此夏の兄来 乳
一書に己の年を荷兮々世ま年形らむ此等
を謂古形くてそ守てなりし 愚考謂之
を則栄具と兄必定元日の延生と元亨歟云
に白延暦なの最澄神護景雲元年に生
家所に親族盛鎧を陳らねて新産を蒙す
最澄稍年長て謂て日呆者種しの色を云
に一ッとして若にるりるし隣里の寄甚奇異の
思ひをなすこと云て 又東福寺の開山栄鎖子中

九ヶ月にして声なり建仁二年十月十五日
の朝誕生す時に雷像明年の冬雷を見て
何といふものぞと問ふ雷と云ものこと答ふに我
生れし時も雷なりといふ傳教大師といひ重一
國師といひ誕生の時の盛物の色と雷の白
きを語るなり名師の叡智を甘歎して我ハ
元日の生れにて松竹の門鉢を始美服を鉢
子の宮上日なれども少しも見来るまきを新く
愚昧こと已ゝ身を省る自れ意なりと知るへし
・我等式ゝ家にも来るやけさの表
莞爾曰なるべくなく言きハやしきおしなるべて
表をむかふるやまくもろ人師兼此頭の意まも
ゆるに一くや
・鷹居て折にもしうし梅のたま

愚考拾遺集家にとにあまたの花も折つきに
移ることも鷹を居て今ゝ夜居ハ戌刻より
寅まで朝居といふハ寅刻より卯刻と云
・梅の木に狩やとり木や梅のたま
一書に神風鈸弘氏網代民部と号す
愚考師兼の歌にうら山しけれ此きゝ山の松に
ちまに狩やとり木の枝にかすらむ此古歌にてのかに
なりへし寄木ハ外の木の生する之息とハ子息
息女の号にて実の子をいふ人生所以泣何本一
幹而分得氣異息故泣重離母義也故子息
息女といふ
・表雨ハ伊勢の重一ゝ此よりぞ
云味堂曰重一ハ伊勢北人枝田自當之育ノ
にして俺諧に志深く白をする毎に紙よりに

書きて行の間に入れて是しるすなり世に紙より堅し
而の法華山に志らふるなり白尾と云く
・隼の尾 法華けうの白尾 一の歌
愚考白尾の鷹と云ハ出羽國司
東藤大納言政教卿鷹飼の名匠に鞍の居志
らるゝとて白羽を法尾して長聖鷹特しうる
ようそなしまの法尾の白きを見て雲をかと打
りひていさきよく舞揚すと云て彼政教の女子
を称津貞直に嫁す時に聟引出しとして鷹
飼の秘書悉く附属す法内無教の業英あして
世に志ある人貴しとかや此時後冷泉院の朝夫人より
文化に勅ありて九八百年の后十に成称津神平といふ又日本紀曰仁徳
の后十に成称津神平甲子朔依網屯倉阿珥古
至皇四十三年秋九月

捕吳鷹獻於天皇召酒君示鷹曰何鷹矣酒
君對言此鷹數多在百濟得別而能從人亦
捷飛之掠語鷹百濟俗号此鷹曰倶知乃授
酒君令養訓未幾時而得別酒君則以韋絛
着其足以小鈴着其尾吾脫上獻於天皇是
日幸百舌鳥拔曠云々鷹に三四の分ちあり不得
十六品の様方皆流義に三四の分ちあり不得
誠訪流宮殿家流称津流に鷹を立てむつ
うしきるものなりと雪宮家鄉鷹百首等に
て知るべし

葉亭の主人 沈に鷲を鷺と
らまして筆意のあるの故なり
沈に鷲なしこの事出習に柳陰
愚考葉亭の主人 王羲之に晋人字逸

少右将軍にいくする永和九年三月三日四十二人
會稽山陰の蘭亭に會す晋書列傳を略
文して云文を善し隷書を善し又草書
に妙を得られた草聖と呼ぶ性鵞を愛す
會稽に孤居する老嫗なり一鵞を養ふよく
鳴鵞を賞むるを求るにいはれ遂に
親友を誓て鵞を命す嫗義之が勤と雪
て烹てのて鵞をよほ義之歎情すれども
かつられ又山陰に一名士なり好鵞を養ふ
義之行て鵞をもとる意に甚よろこひ鵞を
賞むるを求む名士の云我為に徳經を
写して写しまはらん嫗らに贈る一し義之欣然と
して写し早明彼鵞を竜まして得り甚
もて樂とす云つて人に書を与へて云張芝

池に臨み書を学ぶ池水悉黒し人をし
て鵞に醜ひくのぬくなるしむ未必鵞を後
にすれと云て鵞をもてまたりに自意明らかに之
我朝なるまたかな書なるとて彼の学書に
をしらふるの下心之釈日本紀に神功皇后
よりは前にまた文出傳たるに應神天皇の御
宇に使を新羅に出し文人を招きたるに
と云て又河海抄に曰今の世の紀名を以清始
て作りは前の紀名を日本紀万葉集の紀の字
のぬくと日本紀を音を仮て出万葉集を音
と義と訓とを兼て出ふものと又廣中抄
に云四十七年本紀の初之上十二年文字八度
命鵞を作り下二年五年文字を空海鵞を作り
京の一年文字を傳教鵞を助くと云て又行

日本紀は音を仮りて書く
萬葉集は音と訓と訓とを兼て書きしものと
平假名の始の十二文字は讀食作りあと
所立文字は空海作る京の文字は傳教深ふ
片假名は吉伯大法作る

野蠶賤しく繭殻をなす民是をあつめて業とす
用ゆ信濃の奥の山民帛に織なして是を着す
強て絹紬と唱へ絹紬を唐物なりと售帛非
神のゆるしなくしいひて氷蠶の人をあざむきて是
をなすを見むかしよりまさる事平絹に五倍す
・髭に焼臭有べし　更衣
愚考　肖柏老人は集外三十六歌仙の一人にして
して古今傳授の人なり連歌を堺流の一派を立
書を能くす弄流より出て堺流の一流を起し又
人に香は三要とて香酒茶に就て牛角に金粉
をちりばめて弄茶逍遥す大永七年四月卒す
夢庵と号す此翁宗祇の門人なり連歌に定めて宗
祇の賤へ一首を書て秘蔵ありしとぞ
・夜寒さも寝よ一ツ家のひら川家

一書に枝かはりものを枝にすべき花かはりものを花
みすべし一ツ鉢の安きを覚ちの隠逸の歎息なるへ
し　愚考　一ツ葉の葉芽のぬくきもして至てち
ひさき草なり隠山なとに生ず絡垂に生ずる
なり一葉の枝なきを覚しまよとかはりもの宜し
なの記りとりいふまで古歌に萬生しゐるの二
葉のそのおくに夜も忘られぬ葵草なる此歌に
なるむよりいふなるへし
・くらきよりくらき人にや　黄の字
新撰曰和泉式部　くらきよりくらき道にそ入ぬべき
はるかにてらせ山の端の月
・面白うきゝしさいはらの糸縄の字
成美曰きゝしの詞不詳或説にさらしは三に
て糸をはりて縄の数をいふことといへり

を五六ばかりこく蓋し名人の精匠を五拇を
七拇を書ふといへり和歌玄塵抄に住江の岸の松
が根うちさらしとよめるを松が根を打洗ふぬく
なりとさまたる水中に捌く精縄の数しを洗ふ
ぬくに見ゆるをさらし捌くりとも作れりなら
むさて白の意を杜律曰五月江深草閣寒看弄
漁舟移白日この家傍ものなりぬ一し
面白うてやうてかなりしき精舟が
愚考れしろうしろ門にやうて精の口より魚を
たかをて舟に打ぬけるさ方を見ゆへて面白きうた
なれやうをてかなりしきるすをしたしいけり
ものいはまうの命の惜からさらむと精のなりまた
に魚のかなりしさを打かさねまひしを仁隠れ
りひかり一し智度論曰一切宝中命為第一法罪中

殺生罪為第一或書に古文状の辞を
引て歓楽極兮哀傷亥といふ浮世のさ方
の恋に替りを観しまふと云々　愚老れ
もつらく此白を貞室の白を穏にして作り
まつりか本体なまたハ聊覚来別し
拙子や蕉絵書人を恨らむ
一書に火桶に拙子此花を画くるまゝ後
水尾院の御製とも又東旋門院の御好とも
いふ　愚考れ学紙に云書れとりすりの
拙子撰山吹さまたれ拙子の恨むといふ云使
のためやかりたりたり一し
すひつさへすこきに夜の炭儀
風谷曰此名抄曰火れこさぬ夜のすひ法の心地
して人もすさめ法すさましの方やとよめる

に十二の女子の花を学て冬のすひつ志
を火の形さ也今かしすさましきと
難しそう又清か納言かすさましきもの
夜のすひつ夫を一度して歳儀のなり
ろうしさをもて一句の主とするまゝり
夕顔や林をいろしの飄ぶ
此句を林と心持るもの風國於西蓼太康工
院に泊船集評林句解金花傳袖日記に
に出す其心持遠する根元といふは古歌を
るりか仰へるり古歌か林歌なるは此句をも林
と思ひしなるむ夫を只おかよりて
の意にす抱られ一途に於りひ込てりと見ゆ
此瞭聖に眼前夜の顔にあるを象おとや
いはむ又金花傳に曰やかの句法かしの聖

曾雅の名に傳授といふはなりましたれと
古より悟しむなるは皆愛に見るべし既に
古今抄に曰夕顔や林をと句を切て讀へし
夕顔の花と飄の実との夜林の表別にて
句情を飄のをかしくやさしき花の夕顔も
あらか飄になりぬるやと此やはうさかひのやと
思ひしと云々　愚考「みとり形りひとつ等
とそ表をもし林をいろしの花にそあり
なり」此歌に引あてこれ汁てをまゝにも又是理
なり此歌を只一いろに みとりなる等の今見
まハいろしの花のさくと「通去も現在も皆
活定」と夕顔やのやかうさかひとを学えぬ
通去に見て来るものをうさかふ一々むや此
句古歌を精して夕顔や只一いろに白しと

やぶを許す
場合あり
それ秘法之と

名所旧跡
神祇釈教
年月日
人名
二季合体
等月十五に
は
やぶ
やぶり
やぶり
を
ゆるす
併しあらず
「十七日許すと
云ふ其訳が
秘伝ありと云ふ

咲けしてなりかぎ芝かれまるまはいかしの瓢
まるかと未来をまそうこかひし旨之眼前の
やまして未来な捨のぶるまはうこかひなり
芝まして百年の迷ひをたらす蕪しまていふ
るなりきのふや鶴を盗れしの旨をきのふ
やらおとはひやらのやの字なまはぶ芝ふ混す
「かゝれ未来のぶといふまは此前ふ」蕪ふから
すくふなりめの名未ぶ」とあるへし又やぶ
の旨法かしの習ひあり俗雅の名ふ傳授
といふるまはしとまさ字元数宗種之詩歌
連俳名として法のなきるまはしまた法を
字て傳つるか傳受之かしの習ひとまなる
それやぶの法を名不旧詩神祇釈教年月
日人名二季合体芝ふを始として十五通の

旨まかはやぶやぶりやぶりまをゆるす功者ふ
字てあきらむへしさりかゝるまをふゆるすといふ
の秘傳なり
雲孔雀腰かけ不逢くむく
愚考樂天詩飛在白雲端仙人無両足誠ふ名
人の手頃なり
涼しさに板すゆらぬ木陰かな
愚考雲青法印ハ古今傳授の人まして号幽
秘集ハ三十六歌仙の一人なり夫木集「川たゞの
岸の板の葉を忘れみ名り人の中ゆらぬまを
しさまはハ板すゆらぬとまそうこきすゆらぬと
いふ夏手のいひかけまて又俳諧ふかも無ふ案
しまひらむ附していふ法印を僧正ふ准し
法眼を僧都ふ准し法橋を律師ふ准す

氏ノ西紙ノ

貞觀年中始て僧位を定むと云て

新報を云子よりやうなるものの

愚考新報の毒を人の志りて牽牛子を

もて風穀にし蕣の油を狩し毒なるべし

蕣より柴にものいふ也うや霧の書

愚考詞苑集に「風ふけたるうの枯柴のそよし

といひ合せ居いはち散らむ」此古歌をいひ出ら

けるを手掛るり

あの雲を稲妻をまけ使ふ歌

愚考新古今集「何しかるの心なしきそらの

うきゝ雲を方を志り雨のまとのなりけり」泪

を掛つ方に換骨しまふ

ひよろしと狂歌をしや女郎花

一書に続古今集に何なるを志りにの思のを再

間に蔵丁あるべしおしさるこ

勝宝七年始めて行はりと云て又爾雅曰折木

謂之津在箕斗之間則云河也劉炫曰

天河在箕斗二星之間唯南子曰烏鵲

填河成橋渡織女風俗通曰織女七夕當

度河使烏鵲橋集林大斗記曰天河之西在

星煌々与參俱出謂之牽牛天河之東有

星微々在氐之下謂之織女

時鳥鳴やむ時を志りにけり

愚考發房江を万里小路正二位中納言

帝に諫表を献りて此月ひるまきなるを見

惜りて世を逐れ至ひて行来志らしと太平

記にはんそうり時に年三十九中古の賢人

本朝の三忠臣と申合り建武二年三月出

家好心寺の二祖宗弼と号し逐倫隠王

と号すさまはおそ嗜むべきものなり
・うたがひなくんはあらずと荊公
愚考師直を親應二年六月謀叛して武庫
川邊に於て誅せらる一族悉滅亡
・いかしのうさちをかしや月此雲
愚考一休禪師を後小松院の落胤名ハ宗純
紫野大徳寺に居狂雲集曰前年奉賜大燈
國師頂相予今更衣入淨土宗故茲奉還栖
雲和上離却禪門最上乗更衣淨土宗僧妄
成な意靈山飛嘆息多年晦大燈又贊法然
上人遺誓曰法然傳聞活如来安坐蓮華上
品臺教智者如尼入道一枝起請最奇哉又
一休を狂雲子と号す禪師後来の禪を捨
てよく淨土の三味に入りさまはいかゞのう

宮に向ふる云々又林間煖酒燒茅茶
名月ありあるうり又平氣物語に曰京倉院茅
室を敞覚しものはむとしたまふに或夜燈分
に吹ちりてたまはぬ愛宕の供のみ山こ所きよ
めまして悪く掃すてうり雖る枝よりちる
木の葉を猶後の陳にして酒あくてぬりとして
薪にまさそのこと志ゝ
忠入てけりそなるに主上雖に天氣に快家に
却笑せのひて酒を煖るに茅茶を燒といふ
行の心をハそまらいかゞ
やさしくさたるものゝなとをしへるそ
まるしくさまはいかゞ却て敢感に行へう
まて世雅をたをし
・蓮の実の取けり見しける蓮の実ゝ

愚考続世説曰後唐可郁為秘書監時
張承業權貴用事与客燕陳列珍果客
敢無先嘗郁食之必是承業私戒主
者他日郁至惟以乾藕子置茶而已
郁知不可咲購中出一鉄槌碎而食之
承業大笑曰為公易之勿敗吾案白の意
は戯人素堂亭へ行に例の蓮池より蓮の実
を充てまして取すに皆くひ是してぬけ是し
ほとる蓮の実が完う然いかと弛意を示くする
の挨拶之物をのこすは不敬に御たれたのくは
無きしも伝なり
・さて砧孫六中しき志津屋貴
愚考関孫六兼行又は兼元志津三郎兼氏
は正宗の弟子之大和国より来住して世に

名誉の刀工なりさるを今は砧打者に代て
世上の物変をいふなり
・砧打て我にきかせよ　妨が妻
素堂云棒の坊に舎りて付が妻に砧を好
みなむ昔潯陽の江の石とりまて楽天を
なりしむるは商人の妻の志らぬるしや
今坊が妻は砧をいかに打て翁を歌くさめ
しそやとは当まれしきこのきはは江の
石とり是は棒の付地を代るとも又志らむ
一書に雅鏡卿の「みよしの山は秋ゆさよふ
けて古はさしく衣う法なり」古歌もふと思ひ
出らきて已が古はもいて意しくものうきに
をめてはいかうなるきぬと打てきうをよ
やさもなりは猿舞のうさよはすきむもの

をとなりこの地狀ハ書にきめて折とかきたれ
とこれ此制飛鳥にいまして中ハ和歌連歌を優美
に飛なる初ハ書をきを書と寸故にきめて折とハ
をれ折衣とかきすること　愚考和字正讃抄に云
きぬいて和名衣板之略してきぬてといふ又和名
抄に云楊ハ衣を折石之又砧に作る正字通に
曰砧擣繒又藁砧ハ農家の藁をうつ石なり
さきハきめて折の義なり又引板ハ略して
ひてといふ強るに西行ひて引なり大原の里
とよみなしめくひてとあるに名なる時ハ又
引の字同意に見えたるなり
白藁のちらぬそおしらちをしき
古今にのこり形くちるそめてこき機花なり

風ハ天地の語りこと

て世中果のうきまハ機ハ日をかきりてちり
ぬまハ詞に和をたのこさぬを藁の花のいつを
か人めにかりてあるかくちんし
このうちけの手隙見とはや菊の花
愚考手きはなんをはやとそ数盃を杏て見
をむといふ意に藁の花にむすひたるハ神仙傳
に曰藁酒ハ不祥を去り又藁を枕に入る時
ハ目を明らかにす雖ハ長壽を保つの名
なるまたなる一し
なのめ法ちのたれしと夏ゆる時雨け
愚考天地の影とハ風之此日の燭書に風声ハ
天地の語なりとなりしこ
一夜寐て三年なうこと和志くれ
藁叟云三年なの謡にはらハをいつもとひ

なくさむる人のいはなまゝまりはへりし語らはやと
起りひけ
・末かうしに二日の月の吹ちる
去来抄曰二日の月といひ吹ちると働きたる時
見たるかにすぐれたり先師曰前ハ今ハ二日の
月といひかものまて俗をかりて名目をのそけは
さきたるなり
・末の紫燒詩にさひしきゐろりか
敬祇云司一子温公詩詩曰魏野々詩に燒葉炉
中無宿火讀書窓下有残灯
・末かうしに吹とらまゝ今り鷹の巾
愚考鷹の巾を紙にて志はらひて隼の
跡をかくすなり疾気なけしき鷹なまゝハ
鳥さへまゝハなゆるゝゆへに巾を冠らせて

居る之五雑俎に曰隼々撃物遇懐胎者輙
敢不殺蓋其仁也
・青海や羽白黒鴨赤かしら
無味堂云去佐日記に曰黒鴨の松原を経て
行なとに雨の名を聞て松の色青く磯れ
浪を雪のめく貝の色をすゝかに似て五色
に今一色足らぬ
・火とおしして幾日に成ぬ冬 桃
桃亭曰頼て花の蒼みて桃よりかし赤みの
浅くを火とおすどいふを中にも桜を欠しく
蒼て物ゆへに一色とをり
・冬 籠 又 より 添む 志のなしら
へ書に樂天閑居紙曰閑居而復侍此住 又源氏
玄木柱の巻にはきにてかゝまてをかゝまゝ

屠蘇ハ華陀ノ処方之其薬味ハ下記ノ如シ

白朮 桂心 七分五分
防風 一両
菝葜 五分
烏頭 二分五分
蜀椒 桔梗 五分七分
大黄 小豆 十四枚 ソ九品

木はしらそとむはきしきはりとなりへそ
いそけるや屠蘇なるめ初ハ人次第
愚考いそけるやそ初イトケナシ曲礼曰人生十年
曰知又本草小品方曰居蘇此華陀之方也元日飲之
辟疫癘一切不正之気造法用白朮桂心七分五分
防風一両菝葜五分烏頭二分五分蜀椒桔梗大
黄五分七分宛赤小豆十四枚右三角之以絳袋
盛之除夜懸井底元旦取出並酒中薬散沸
家挙東向従少至長次第飲之業滓還投井
中歳飲此水一世无病と云々
年毎に高居の茂の蒼の那
愚考其日季其清太天皇貞観元年十一月
九日始て行なる二月申の日と其日大明神を
称徳天皇神護景雲二年正月九日和列三笠

高居は入時に潜り出る時は潜ず

山に垂跡之日年十一月九日に造営と云々又曰
其日其五播家の祖神なり此神詠に曰ふる
らくの南の岸に家居して今そさかえむ小の茂
浪詞花集に其日山水の茂浪咲しよりさかゆ下
とそうけてしりにき又高居の出入其生花の
意にして入時其内出る時其外より出しと云々
爾雅曰鶏棲於弋為樔鑿垣而棲為塒又詩曰鶏
棲於桀志うまはハ鶏棲の号なるを花表なと
書其大に謬なりとかや鶏棲其笠木と黄木
との間に棲を名とせり略して高居と書来
すまつり華表ハ誹謗之本造り方格別之
沓書も忘れりにかさす樔の那
愚考伊勢石清水其二所の宗廟之欽明天皇
三十一年建家國宇佐郡に建座其後清和

灌佛ノ始マリ

天皇貞觀元年八月廿三日今の男山にうつ
しまうとて條時柔の始めて村上天皇天曆三年
四月中午の日平將門退治の祈禱の為なりと
云て去後三月に改めまゐる花會余情に曰條時柔
挿頭使菊舞人樣陪從山吹と云々正德体抄
に宣家卿「ちりまちし夜にすまゐり無行の大
家人のこのさ手樣なり」
・さふの日やついてに浴に佛 達
愚考云僧傳曰四月八日浴佛以五色水灌頂又
法家法數曰灌艾納都梁以上灌佛の三種色
と云兼和七年四月八日律師靜安清涼殿に於
いて始て行ふ又推古天皇元年始て灌仏云行に
とまいふ
・面瘦て葵付ふり髮薄し

競馬の始マリ

愚考競馬の始マリ文武天皇慶雲三年五月
五日に始るとし云々
・菊 菜より七夕草それなんえよりき
弁地曰万葉に「秋の聖に嘆ふる花を自にと
ほてりきかれふ遠八七草の花」又「萩の花尾
花葛花瞿子の花女郎花藤蘇の花」
・五しきの夜か一トのと略り 花
愚考十月朔日百度夜を更に此日群臣に
水魚を給ふとて五度百度同し意にや
・舞姫に幾度指を折ふなり
愚考五花を元日白る階前獨午を明之
年中行事曰十一月中の丑なり本朝月令曰
清見原天皇吉聖の宮に在して琴を彈
ひ給ひ遠に天女天降ほ琴声を感し五度

袖をひるかへしてふ袂に乙女子かをとめさひすもかゝる事を乙女さひすもさかゝる事を公事根元曰舞姫は五人之さて此てまをもは幾度とうたふてはなると萬るの定法之さるをとりとりそつて見ましハ元日より白馬踏歌猶年賀明と歌を五度なりと爰にて治定しふ迄ハ今りとは萬るものゝ古往今來めつらしきてまたまて中し凡衆の及ふへき不まかしに能しれりひ味かふて感ひすへし或書に曰旌略天皇二十二年外交に迂交りて行幸の時天人降て神樂を奏す此例によるといへく

追遣てや服ふはのあ　愚の面

愚考延喜式曰方相といふもの面に四目を付て鬼せらひしより始り桃の弓芦の矢を執て宮城の四門に儺ふと云々続日本紀に曰文武天皇慶雲三年始て大牛を作り儺ふて疫疾を拂ふと云々此夜豆を打るは後漢礼儀志曰昔分之夜散小豆又名物六帖云教坊記曰大面出北齊葉陵王也恭性膽勇而貌如婦人自嫌不足以威敵乃刻木為縦面隙陳甚之此詩歌十六句各歌まて此らかなりまは論に及ひ

禅閤の撰ひのこしまひしよせすかに

愚考禅閤は一乗禅閤兼良公後第置院後出淨門院両代の関白之関白の父を大閤といふ大閤刺髪して禅閤と自称す

鶴蟲のきかう打　なむ法くなかみ

秀地曰きなうを学なり玉簪草と書全体
擬室孫の義字なり葱の花をきなうといふ
糊賣充婆の髪のちひさく結ひたるをきなうに見立たるなこれ結ひたる髪を末藻髪
なり俗に九寸九髪といふ

五美人

・うけろふの抱つけた我衣の那
愚考李夫人を前漢外戚傳曰李延年妹
なり漢武帝后宮中又曰婦女に五等あり
后夫人孺子婦人素是なり漢書曰上思
夫人不已方士少翁言能致其神迺夜張
燈燭設帷帳陳酒食而令上居他帳遥望
見その時夫人の姿なりしとなりたる武
帝詩を作りて曰是邪非邪立乃定之偏

何嫺く其来遅又夫木集に李夫人に新す
雅有歌「あのきく人をうつる煙まもそれ一し
いあのはらさそおもかなりまんぬ」
・長恨に帯ゆるみをうる庭部なる
愚考楊貴妃を弘農の楊玄琰が女なり唐
玄宗めしして妃とす貴妃を女友の位にし
て后に比し相國に比すと云く夫木集に
李夫人楊貴妃に新す歌「夾帳に忍みをつく
ゆる花の色むかしの人れ面影をすゐ」
・りの数寄やむかしの其の侵なるむ
愚考昭陽人を十六葉にして漢室に入生
涯帝のれいはうしみもなりかしと云く夫
木集昭陽人に新する歌高貴の朝臣「んの
なしやむかしき床に明くまでとしれ

六十年の雲にふるゝなり

花殿から植かへらるゝ牡丹か那

愚考西施は會稽の人薪をひさゝ徘は
の、嫂なり越王勾踐の宮女なりしを
范蠡漂て呉王に於ける勾意明らかなり
百川学海曰西施を牡丹芍薬に比す王隣か
詩芍薬法来功已成堂看終日慰残生呉
王若在應多恨写醉西子不奥晴花ハ
芍薬を牡丹に紛り改めたる子細は芍
薬を植ゝ一連ハ一二年は花さらぬ花之
牡丹は植ゝ一連ハ並し花のよろしく年ハ
なり是則西子か身に比するなりさて
此西施は夫木集に陵園齋の歌なるを
西施と入智なる訳は陵園齋といふは

天子崩御なりて陵墓に入是宮女達の号
にして甚忌しきものなり連ハ美人と振
聲なり夫木集陵墓齋に歌する歌二首
春の愁秋の愁の作なり此三代にも今
は秋りに今ゝ松の戸をとちてかへ
りしその日よりなくなる夜もなき身の松
もひかれ三玉集月もおもしいかに見さらむ松
の門いてやとれもへと俗にてぬ身を又白氏
文集に松門曉倒月徘徊栖城受日風蕭瑟
詩歌とも其の意明らかなり隨煬帝も
当ら陵墓の齋を思ひしと云々

よの木にもまきまきぬ冬の柳かな

愚考漢帝草干に王昭君を松ゝ昭君ハ三
千弟一の美女なり画工の禍によりて止まり

ものなりさまはたまたしめ偽書なれ
し書なるなれば今盗人の罪逃まじ
・枯枝に鳥のとまりけり秋の暮
一書に此ハ季吟芭蕉壽堂一派新流の
華活に傳の一章に夫木集書かくすねくらとや
をむこのねてより我身のえこれおそろしきぶ
花の華の業枯をいつて人ハ無光の観想も
あるべし
・茶筆にのせてのたし一ケ酒の間
愚考酒を煖るに意温の間をかてよしとす
なる迎へ間こと云晋朝雜記南史にはしたる獄炭
有昔羊琇といふ志獄の形に炭を燒て木人
形に酒瓶をかへさせ客のきこれる時ハ彼
獄炭にて人形をして酒をなしめさせて

源空即ち法然は天台より浄土宗を完きたり 承安五年 昭和二年にて七百五十二年とする

そちとは宗旨しの夜体を上手に作りて
ものなり月の雲ハ狂雲ハ雲の字によ
まるなるべし
・嗚呼に泣くろひのなき鶉ぶ
愚考法然上人ハ美作の人名ハ源空
天台より出て承安五年四十三歳にて浄土
宗を開き一向専念にして建暦二年正月
廿五日東山吉水において迂化嗚呼の法
くろひもなきとは急仏三昧なりか故に
・八重霧奥にてまたる竜田ぶ
愚考歌にまたはれ禁斗に咲そめて
花も奥あるみよしの山此歌ハ禁ばかり
をまたる八重ハ千の古めたるに木の芽
のかくろひかくれるをのこるくるなくまけ

入てまゝらと形りむ花に至る者聖に詮
因と心の對なり
白魚の骨や武部か大江山
愚考武ア者後一條院のあり和泉武部
か娘なり長元の頃敦人の數に入大江山の
歌を則序の名歌にして縦ハ白魚の骨
の潔かぬしといふ心なり
唐嶋の松を花より臘にて
一書に此ハ第三又平ハ此ハ手を入ける
他評を後人の意なり翁を角に中さまき
ちかをさて波や去聖の入江に弱止て比良
の宮松の花をまゝらかな所に花りひ
家ゝりとなり是を花よりも松の臘を
面白かゝむと未波定の中の波定のまて

なりしに無ふ　一書に花を尚季なきとも
名高きに松此ハ多なきハ彼花を惹て松を
祝する意なり古今抄去来抄にまゝ
き角去来の兵皆理屈々我を以花よ
を松か臘にて面白かりしと　一書に唐
嶋の松樣より臘にてとをん第三体なり
唐嶋の花を春此夜見渡してとをん
平ハなりと云々
藁一把かりて花見る阿波手ゝ
愚考阿波手の森阿波手の浦尾張なり
基俊朝臣阿ゝら和を伊勢の演萩ハ愛
て妹意しらにまゝ月か乳伊勢の演萩
を愛て月見むを奇のさまなり藁愛て
花見むを是俳諧なり月と花との心對

まして奪胎換骨の法なり

・雲殿の鬼獄さふき孫生ぶ

愚考琵琶橋は名古屋より津崎への往還
にあり長六十間余鬼獄は美濃にあり

・関さえて寝も前ぶ所さかぶ

愚考夫木集に美濃の国不破の中山電
冴てと詠り水の関は前川寝にその吟なり
一し前柴前白の三坂を六少と白妙の我衣
手にぬきまはりたる前ぶ所の名不
なり宗祇法師は連歌の中無之紀列
の人也歌を一條禅閣にうけ東聖列より
古今傳授有集有三十六歌仙の一人之
文亀二年右列湯本に寂す年八十二

・吉聖出て布子賣をし更衣

愚考旅中の更衣に賣かつれ者なるまとも
花にふまてくる布子なるまは賣惜しとなり
古今集に橋色に夜は深く染て花
花のちりなむ後のかたみに附に吉聖
のなるまは

・五月雨にうれぬものやせたの橋

一書に主角曰此橋の名大かた名不に通
ひて矢刻の橋とも中へきまやも橋の
の天にこのる勢田一橋に限りへからんと難
しそるよし京大津より雲元侍る去来の湖の
水ゆきさりそり五月雨といふ誠に明鏡一面
にふりて水接天とも見えぬ八京を亡せし
前から此一橋をも見聞る時といひ所とい
ひ一句に得る京物のうこかさる場をいか

て及一きやゝ草のねにねはうらはといへる
瞽老の數ゆるへし
・牛も物し鳥類のあらすれば月夜
一書に万葉山城の強田の里に一るまゝ物見
若をれりへハかちより是ゆく此歌木幡鳥類
田をこそ是勤なるまゝとするを勿論牛もなし
といへ物るへし
・みよし聖をいふに秋立見れ意
愚考見ゆる千手経曰若一切之庇生法天善神呼
ハ當に手自法螺すへし器録に曰螺の物をもつ令
命をかし事を觸ま変を告鞍に合をもて庇の
雪を明らかにす勿論生見を用ゆ資為付物
記曰大日如来南天鉄塔吹大法螺為説法以此法螺
授釈迦釈迦手尼仏示絵樹菩薩絵中曩祖行

去従冥面滴入絵樹菩薩淨古奉値遇菩
薩佛受先方之時今猶有大峯吹法螺
者驚庇生無明眠方軌也自問自答して
云吉野に見の高をさすあらむ秋立と
いふ詮なきをめ自然に行かりこの
なるもなるもなるしからむ只此なる
居なるに推しかりそれなるまゝハ猶し秋
立をまゝらにもうらへし変に仮志の
越白といふを蘇と見しの間を眠に見
立たるなるしてこゝに凡意をもてを見
えからむ是蘇と見のうたりといふを
六月より十月にうたまゝにて火魁金と
故に後の武なるすを皆人知る所なり
去歌から中古よりのなるもしに延喜

或ハあらて六月十二月の晦に此祓なり全書
曰金峯山之例の自褒且飛来の時一両小
飛来る詩曽則六月朔日く故に六月の異
名に従ひて林鐘と号す是時日本に
よりて鐘あらは世人甚是を奇とす五経通
義曰鐘者秋分之音也此山に右のさりて鐘
の音より峯入の貝の音にかへりたる故に
いふに秋立とも音は自然きりみよしのゝその
支のやうにまるて悟るへしそのてにあそハものを
おもとるのてらにをえなり

夕月や杖に水わけ名角田川

愚考 淮南子曰清水水音小溜水水音
大と云く 杜詩曰挑竹杖引云杖兮杖兮
爾之性也甚正直慎勿見水踊躍学変化
為龍矣 又金将石試水将杖試鉄将毛
試之遣ハ角田川に平泊りして法に近く
水の流遣す然れハ清き濁を見て深
みタ月の比遣ハ目にして見分かたし杖
をもてこゝろミしも言ふによりて清濁を
試ミしにやあるへし

唐土に富士あらはけふの月も見よ

愚考三国一の名ある遣ハ古きに十三夜なる本
朝のものなりと我朝自賛の一句く富士山
なる士を富さむとよふの号なる遣ハ神なる女体
なりとふく

雪の富士藁家一つにかくれけり

一書に慈鎮「ひとまでみあひまれし富士の根
名をのきえの思ひ出て見るかな」の古歌をふるなり

吉野山も峰大雪のゆふへ
愚考家にも出さしし吉野の山のよきに京色
も大雪に降のくさまして有り山の道まて
見不知くと思わ
夜の月や不破の小家の煤拂
愚考夜の日とも夜を日に次といふ
なり孟子曰仰而思之夜以繼日晉書曰車
胤練嚢に数十の螢火を入以照書す以夜
繼日不破の小家とも不破も至根より月
を居るなり詠るを書とすれ不破に十
三日の月なりに燥拂しき小家のるなり
も雪の日にさらしと燥拂ふといふ義な
なへしさまハ不破の家にうこかぬ手法よ
さんとなる一し口まで不破の吉野此と

いへと白川にも就田にも振まるなれ本意
なるなる一しに手にいふて理屈詰取らむも又
うまとてからむ不破関ハ其武王皇白鳳一年
始て落列に居らると云て
雲雀より上に休らふ 沖かな
一書に何京明か詩に隣坂盤雲上秦城
向斗看此ハ雲雀より空に休らふといふ
なれとも云て
花の詩に似たる旅寐かな
一書に忠度にのゆきくれてきのもとかけを
宿とせん花やさいよひのあるしの付く
郭公 取みさ杞さくて笑ひかわ
此考曰なとしきすれ先ハ不告の事なまハ
泪も落ぬらむ

・文級の月は二人に見らまとなり
一書に祖翁の曉一人泣といふに二人に見ら
ることは俗らまとなり
・狩野桶に鹿を殺したけよ秋の山
等笠曰一説に狩場にて老に桶なりとするは
非なり一し狩聖桶と号又説は法眼元信
未口布次布といひし時甚美にして能多の
料に充むとちさきに桶に花鳥草花の類
を画てひさこのをまりと云てまきしは俗に人
なり是に併まきして鹿をなしたけよとなり
・澤房の墓を　わりまとれ秋の雪
愚考沢房和尚但いるの人名家彭大徒ち
住職沢川東海ち宍基正保二年九月寂
墓印唯一箇石耳

・学校大もたらるゝか夜りの声
愚考湾房悲泣野子悲雨窠に居りの
ゝ雨をかるしむ故に犬も我居り不に
水のなかるをかれしみて彦をえるに
やとなり
・いく筋紫ゝまとなと袖も不こあひす
一書に衣のなてはゝ不こあひにはりのうつり
るゝむとなり
・天龍てまゝかまとまく雪れ雪
愚考天龍門は玄源位列設傍湖より
始り是列巻因頭に出大天龍小さ龍の一
筋なり自れ意は本朝陰園十訓抄曰雪相
院の地面佐岌会湾厨憲清朝衣を脱して
用人と成西行と号く是下人も又志を同

しうしてお往ふ西住と云既に東国に越
かむとを江国天龍川に到りて対を武士
の家ゝる船に寄す船中人多くして船く
徒か一らむとす時に武士此来門下まで退屋
しと突きたり箠をもて西行を打き叱に血
をそゝく西行がしもうらみ憐るるなく優
能として船をも船き去る西住是を見て甚
哀泣す西行の云余塵を出しより此来
誠に業種の実に及ぶるを知る不意の禍
是より大船るなりとも又何そうき一む
何を案ずむや汝宜しく古郷に帰る一しと
西住止るをなほ東西に和歌此るを
只し堪忍を大切にをよくの意有る一し又
十六夜日記に云天龍のわたりといふ船に

のるに西行が昔もおもひ出らきていと心なそし
・里人のわたりは此　格此　雲
愚考七文字の例の謡の詞にてはひ法るか
温庭筠が詩の一聯鞍声芽店月人跡板橋
霜又新明新集にけさきまこ人もこのよ
ぬ詩見えてふむ不ともなき霜の板橋かる
詩句の趣にも似法るにや
・塵をきと二人猿楽そまのもしき
黄山日雨話旧抱情不恒炉辺語旧を方
朋一宵お對無余事燒竹烹葉記我艶
・きゆる時も氷も消てたし家之
呼尹日成語考日勢易尽者若氷山なるにや
・ちり花にあふさ船かり奥此院
愚考花花葉なき声聞縁覚の後さ

すでに菩提の岸まて入らんとしてあまさの舩
うしろよりこゝろにさゝへて繋く　モトヽリこ
父母のしきりに恋し　雉の声
一書に良弁僧正の鷲にとられたりしは父母を
恋られしとて歌によみしと聞く山田のきしの声
父にやあらむ母にやあらむ　此余の注釈なと應と
さまでハ略す
されハとてなまじひなき僧の雲水の客
一書に伊勢物語になまじひすなはちなまじひ幾代
の宿なるまじや何ゆゑ人の花と見まじきもなまさの
詠の風流なり　一書に古今集に里あれて
人はふりにし宿なれや庭もまがきも秋の
のらなる　愚老おもふに二首ともに不住捨なる
宿の歌なれハ卿の意にはあらさるなむや

此なる人の、唐衣きつゝなれにしとなまし六歌政
集にあそしからあまりてなるくものゝ宿なるまじハ花
なりしなのめてなり月さへ見えなり変にありてされハ
古そとのゝ歌によりてましよなすなる一し此されハず、
そとりに詞まて古語古歌古事物語なとの恋
うしるなまく不のなりて恋りな又いくつもある
なまなくして粧すなる故の詞とてまじきを詠まし撰
書なれく只さまへん古そなまとりになるなゝする族
なえ元猶なゝ行なるらりさし或ハ此寺や此あ
なり等の数皆粧なるなまへ不ゝあるてなりそ
なさになるむするそ皆是神仏を迷ハするの
罪人なるられや
本ろしの葉ハやゝる小指ぬ
愚考曾子從仲尼在楚而心動辭歸而問

母々曰思爾齧指としてこゝに孔子曰曾參之孝
精感万里としてこの故事をあげて旧里の人の云
をいすと謁書まてなきとも小指をこのむ事に
てなし一句濟ふて寝ふ涼しく木枯の女の挿櫛を
うりて一句此姿を破れ鈍き事一木の巻にある
所あるは人木枯の女が嫉妬よりて小指をくらひ
切りたるその縁に木枯の前栽破るゝと
句此表よく作りたるものに指をくはへてある
所行手をおして物思ひしけるとこるよみ出れて
いまひとつやうに思ひうきなし縁ていふ万
水一露に木枯の女と指くひする女と二人の
女に注するは大に非之甚しくこの涼しく万水
一露箒木の巻よくよみて其誤を知るへし
前栽このくみとつかねともならぬやる

愚考總舍建長寺は後深草院建長
五年北条時頼建立開山は蜀の隆大
覚禅師と謚号す禅宗なり法乗法数曰
掃地に五徳といひて自除心垢亦除地
垢去憍慢調伏心長功徳是なり庭掃の
奴僕と成らば塔塵をはらひ清くきよむともあら
ぬのしるしへ一担箒の句に庭掃て出るや
門のちるの柳是とうれて又五ツ宜の布施の徳を
我人が己の自身の境界を清くきよむかつ
我たちに非み水塵に布施の訳をも解する事
あるし
○妻此聖にて心ある人此妻歌の邪
愚考琵琶の詩に卻嬉勝数段新色又
東坡の詩に妻面常嬉数翫洗粧不退

唇和又漢武故事曰幽吟録曰武帝御
葉に從ふ同車の美女十六人自然の美
麗にして皆臺面に更に粉黛をかさらず又
清かに納言に女をもとめ遣をよろこぶものゝた
めにうたち法らずすと云て是則をのまをつ
しむ心なりといふ意をふくみてあらはゆかし
くさして故に惡の報の首重なるを居し撰集
の人も心ありてゆくし

きぬしや余れるよりも　附録

愚考杜鵑初時そ時人を離別の悲なりと
そ思ひてのるをさまはハ指遣集にも志のもめにな
きさまそいたまはゆくゝきすものれかに常にたる
らやなるむ惜していふ古詩古歌古事相語
ることに添ふを弔うすを志なり只自に向にて

を解しかたきに故にものを並べてその自れ先
をのくらう計て一々詩により歌によるといふ
なりにてのさらしなすしまむ人六指の罪を
咎るなりまを

虫なしの目にふらつ枕ふたいぶ

愚考詩曰角枕粲兮錦衾爛兮予美亡此唯
与獨旦又白氏文集曰鴛鴦瓦冷霜花重古
枕旧衾誰与共又拳白集に古き枕古き
ふすを万のうたりまもこのハらてのこる前遣
この報しも

虫なしに小袖若て見る女こゝな

愚考万葉に我妹子かかしみの衣下に若て
なりにあふにまてまて我のかめやも此自を古歌
元にあらんに摸写変態の法にして男の若

声聞豫覚の花蕊葉を因とすなり花
をもてて世界を悟り弥陀の名号を唱一て
夕の歌とかて未知の姿も見え侍り辞にふれ
此句に梵音お通の玄旨を含み彼といひ
覚といひ辞世と見て難すべきにあらずれば祖翁
も仮初によりしと思ひて序文をハ書ありひ
ゑむ菩提山と書きハ此句よりし感すべきに
あり或縁に曰菩提覚所求之佛果也との
ある意味をもしらん只一涯に誤とするを海志
の眼を借り海月にひとし
笑つちりつ陣 なきけし此畠に
都柳曰釈氏要覧曰生滅輪回曰世界迅速を
志少不定の義に元之自の意を則人間不定
をしめすなるべし

南無や空もし有物のかくしきす
愚考悲華経曰佛言南無志決定法佛世
尊名号音声と云て瑯琊代碎曰釈氏
称佛菩薩名号皆冠南無二字と云て源平
盛衰記云重衡卿の害まらるゝ時時なれ西
に向て嶋にたりそまハ花のふるのこり合さむ
時なけにうれしきかな西へゆくなる彼覚思ひ
合さまていちしるし
橘のかおり歌見ぬ はかり なり
愚考日本紀垂仁天皇九年田原間守に命し
て常世國に遣して橘を求めしに十九年天皇
崩御翌年三月改朔自意を明らかにこと又奇
さにきまつとなきまちたれの風をかけてむか
しの人の袖の香をする

なりまとさや燈籠一ツ　に主コ歌
愚考燈籠を明月記曰後堀川院の作時に
盆会に用ゆと云々東鑑曰追福万灯を
教朝公為救平家　灵魂盂蘭盆　万灯
供養被行と云々　一書に主コ歌を蔵ふ
ゝ別号にとらふを非なりコ歌を江戸の人又云
コ歌とよむ一し　路に神懐紙の迷るに見ゆ
盂露や小町の骨れ見るさよ
愚考市原野を先布祢の下なり小さき房
の南の方になるめの薄とけふて繋蔵きり
小町の骨とを別薄なる一し小町を兼和の
詠小野良實の女なり名坂にて死すと云々
又冷泉家の書に六十九年井出寺にて死
すと云々なるめの薄を江家次第曰真列八十

為に小町のとくろれ死なりと云々　杉原の
ふるに法華ともなるめしをのとをいはし
薄れひ分り季吟曰下の句を業平朝臣
の時ありと云々此てにはハやと切てよとを
二重切と見又人名一口の傳授なり
女郎花死出の里人そ達そのむ
愚考新古今集にひとりにてなるなれもひを
なき人を旅の空にやうなしかるむ古歌元なるへし
埋火もきゆや泪の烹る　青
一書に去嘯子めくりなひめ古きし泪もつきし
かつりいよの山をこの数の所のりに沸かつるを
烹りとを新らしみて
神垣やれもひまかけに涅槃像
一書に金葉集　神垣のなるりとれもへと夕

まゝすきにおもひまゐらせ西上人の
古歌ゑれるゝ一し　愚考楞伽經曰涅槃不
死不生之地也一切修行所歸依也又法華
云上金口親宣曰為度流生故方便現涅槃
廣如壽量果又儀八言傳曰昔優填初刻
栴檀亦波斯始鑄金質皆現写真容圖
妙相と云々
　たはきりと宵明ゆるさくらかな
樗山曰双林寺中小西行撰といふ宵花のもと
まゝて春死むさきさらきに此是月といふ歌を
云倉めくらものなり
　連翹や是日と思ふれなり
愚考是又やまりの二重助まて新教之日なり
傳授の一四七西行法師を業次四年二月

十五日寂号円位儀養太秀郷の後胤之聖く
ハしくはさうみの集の附るにはなりたる
　木履なく僧も何りなり　旨の花
一書に此ゆるは初漸にてのゆるに法が納言にある
傳なりと云々
　鈎鐘を麻てまゝく花の寺
愚考三井寺の吟なりと光ゆ山とは叡
山れるに寺と中にて三井寺之撰集ゆる山
と寺と中悪きにて此宵て山の為に寺燒き
侍りしとなりは是之源氏に麻をもて琵琶
をまゝきにまゝに此詞を摘て立入まるなり
　花に酒僧とも侘心塩膏
一書に淺茅日輪寺の僧と連歌のうこ
たらに對無してと猶書なり陶淵明盧山

の交りに惠を法師に魚肉を法きつけ
たるなれ佛にやと云て
貞享戊辰の年弥生朔日
東照宮の別當僧正の御房に
慈惠大師 迁産執事 法華
八講の侍るよし當きるまゝハ
醍醐にまゐりて席果のおろを
散花の間にむかしはるしぶ
愚考 東照宮は別當は東叡山内寒松院といふ
慈惠大師は元三大師のなまこ天台産主魚融
院の良源といふ自分讃をとり新を写して
曰我像を墨不ゆるは邪魅をさけむと云
今東叡山に所る所の像は弟子学超は
當ことに云て江戸稲子ゆるは民部法眼の筆

なりと云て 寛和二年正月三日入滅と云て
法華八講は僧八人にて一日二巻宛講するなり
とこのや石渕ちは勒操延暦十五年 其友栄如
の母の冥叛に終きられたるの始なりと云て
八講といふ布は加賀国より出す是は法華
八講行ふ時に僧徒に施す料なりとこのや法
華第一序品に曰天雨曼陀羅華摩訶曼
陀羅華曼珠沙華摩訶曼珠沙華散
佛上及諸大衆
不可しと云る 自やあひは玉
愚考 諸女成佛の不ゆるは法華経提婆
達多に曰いかむそ女子速に佛に成る
をはむやまた時に諸女一ツの宝珠有價也
三千大千世界之以て佛に在る佛則是を

受まし　ます　雑女智積菩薩等老舎利弗に
語りて曰　曰　宝珠を有り此等網更しもしに此す
疾しや否や答一て曰甚疾し女の曰汝の神力を
もて我佛小なるゝむるを飲をよ又花よりも
迷惑むむ尚時の応会皆雑女の忽然の為に
変して男子と成て菩薩の行を具し則
南方無垢世界に行宝蓮花に座して正
覚を三十二相八十四種好ありて響く十方の一
切衆生の為に妙法を演説するを見ると云て
自意をめつらかなり

古寺や法るさ故鐘の堂　卿

愚考ちなとして三井ちなこ三井ちなとして天智
天皇天武天皇持統天皇三天子の産湯の水
を汲む故に御井ちなといふと俗にいひつたふ

智徳大師改て三井ちなと文字を改むと
云ゝ例山を教待和尚建立す長等山麓を嫁
寺といふむかしなりの山樹とよみしも此
山号に鐘を儀義太秀郷雑宮珠よりなる所の
千宝の一口なり此鐘を天竺祇園精舎の良の角
に鳴るに蒲牢にて涅槃経の文を写し名
鐘なり文永の発動に山徳の為に歩破てよ
里を声を出さんと云ゝ

灌佛の日に生れ給ふ康子ぞ

愚考灌仏を日本後紀曰仁明天皇兼和
年中傳灯法師始て行ふと云ゝ康子八孔子
家語曰鹿を六ヶ月にして生ると云ゝ

れとゐくや門もてありくせうきれ

師尹曰五雑俎曰七月中元日謂之盂蘭盆日

秋七月十五日
目連ノ母
臨終餓鬼
救設初造

目犍連盂蘭盆会は
欽明天皇
二年秋七月
十五日発る
寺西ノ園
にて始めて
行ふ

連因母陷餓鬼獄中故設此功徳令法餓
鬼一切得食也

・形ちかけの火をとる虫れかすしさよ
愚考形掛切竈盆粧鏡なり

・魂まつり祝ものり酒をも向かり
愚考盂蘭盆経曰七月十五日具設百味百菓著盆
中供佛之祝ものり百味百菓をあつめ積合せ
たる酒をも向かとなる一しし盂蘭盆会を目本
紀曰欽明天皇三年秋七月十五日須弥山形を
造りて新ひあはせと云々
飛鳥の寺西の岡にあり

・魂まつり道ふみ欽明の世
愚考かの飛鳥の寺の西の岡の辺の石舞台なる一し
なる人家の家物なりとて水鶏と
鶉とを食ハしふ家を感して祝と

屋をくらたれ

・屋くハぬ心 佛ふ ふるら 尤ぬ そ
愚考欽明の京都の京都とて年中十二月ふなり不僧
寺絲 雲雀 杜鵑 水鶏 鶉 鶉 千鳥 水鳥之
十二月花鳥とて又十二月花なりさて世ア心なる心
仏ふ習ハぬとしふ経の名ハ忘れたり西域ふ比
丘なり群下の飛ふをるなる芝我食ふ充一しと
則此ふ蔵つ佛の日芝屋王なりふ一かしけ
則ちて屋宿を建ると云々

・燕より此寺ハ 鞍 うつ て
一書ふ雞波の謡ふ振ふて寺ハさいさうらう
たうらうの曲をかすりうけ入日をまねきかつすを
ふし今の太鼓をば波なまきハよりてハ寺かつてハ寺
愚考鞍をかすりけの初年まて乙なると寺の

詮れなりし夫木集に人すまで殘れる事をぬ
古寺に狸のみ古て鞁うちくまし狸のみに鞁を
うちすれば狸の腹鞁といふめまとて乙なるもする
とき狐をもてかつりうてと申知しうるを志るも
寺の奥行こうつりうけといふ祠をハそまにかり
そこらむ鞁を則太鞁なりうつりうけといふ祠を
もて帰燕の杖乗とそきり名人の手段を又
搭別なものゝ当時の人の刻数とてぬむる又をかし
・珠の子に木綿をうくる法甲ゟ
愚考托鉢のるまを食をもふものなまと来世の今
に至りて綿托鉢なるとをするもうけりかゝる世のなら
そしよし一日の主とのるまり右に湯杖をおもた
に鉢をおし七家限りて食をもふ是比丘の法律
なりして詩披といふこ鉢に七種なり木鉄金銀銅

瓦瓷なり又鉢中の飯を五つに分て其一つを
路行の飢人に施し其一つを水中の庇生に
施し其一つを陸地の庇生に施し其一つを
七世の父母及餘鬼庇生に施し其一つをみ
ほとけ食すとて故釈尊曰日食上分を充て
曠野鬼神の分とし或を河利鹿母神（きこしほ）の食
とし或を魂灵神の料に充つ普く諸鬼に及ぶ
か故に散飯（サハ）と号く又律の法に其数七粒に限る
又生飯三飯三把とも書なり本のし訳あり
・まゝにこの涙や恋に氷ゆるむ
愚考鎌倉の安國論なる日蓮上人正嘉の末
より文應の初まで四ヶ年の間岩窟に籠りて
安國論を製作しまゝに故にまゝて号とす
・雪鞋やうゝ二王の斤腕

愚考二王ハ左ハ密迹金剛右ハ那羅延と
号本地大日如来佛法應護の為にして阿云の
二口明塞と云ふ意を明らかにの之
・俗ハ慈しむ此ハせしも雷佛
愚考新拾遺集に丈六の仏を雷まて作り
て供養す瞻西上人いまし一の鶴の林のみゆきと
かと思ひとくまてなりけり此作を云
まりなりけり
・千観かるまかせかしこしの人
一書に千観ハ橘氏相列の刺史敏貞の子なり
初三井寺に在後に津の西邂逅山に住て明
徳口に出て自ら言ふ夫に成り行人を惠む性
慈悲ましく嗔る色面にあるし老に微笑を含む
俗を遺像をなして笑ひ給ひしに
愚考津の西

岡中金龍寺の岡山阿周梨位に叙すその父
千手観音にまして授る所の子なり故千観と
号すと云ふ手のみ此ハ言せ話しと
いふ言ふてかれ字を助字之を師を云ふ心を
出めしなり
・古宮や雷あるかしら獅子ハ
愚考左傳正義曰在天曰神在地曰祇自本紀
曰天神地祇アマツカミクニツカミと訓す玉篇曰猨
倪日行五百里以虎豹為糧又曰師子者畜類
中之王也故法佛薩埵乗之智度論曰四足獸
之中独歩無畏而伏一切者似虎正黄鬚尾
鬚毛太如牙と云ふ
・月代も老みなりけり梅の露
愚考さかやきを砂石集に始て月代あるを

入居とあまたハ諸倉以来ありてなのきこせしこと何
やらに見ゆ

・絵写見る人のうしろの様に
愚考名物六帖云朱子語類に漢桑河用
御就御写皆以木為之已並紙残之衛と
云々神写を献家代ましこといふ

・彼麻一度に流す 此祓なり
愚考五雑俎曰四時之相禅皆相生者也
而獨反禅於秋以火尅金所畏也故謂
之伏祓志潔身也廣匀曰除災求福謂之
祓禾篇を云ふる亜かたらに示篇なりと云々
此祓を世読問善曰天武天皇白鳳三年六月
晦日大祓朱雀門に集りて祓の儀式なり
或を又名越の祓とといふ

大國夷
西祓は
玉家の
鎮守神之
祓は大國
子は夷

・此月の夷を出ちにあらず うれ
愚考惠法須を事代主命にて大國主命の
御子なり大國主を大黒なり神名名同数
聚鈔に曰日主の学数す一きてすを望知すなり
の事代主に志りて宜なるかな毎家此父子の
学像を合せ祭りて数報すること吾國家の
法神幸を待ものの何そ此年にあらむや

・肩身を幾代になりぬ志にまこと
愚考津守國基の歌年経ましと老ぬ世に
して和歌の浦に幾代に形りぬ玉津島姫此
歌の詞を活みて有りぬらむといひかけて切に
なりしと志るべし

・君が代やみかくるすのきこ 玉挟
愚考諸倉右大臣子代挟伊豆の御山の玉

挾八百萬代まいろ者かたらしといふ志とく
毛かはらねハみかくるまゝらしを挾といへれを可く
るまゝきと虚にあらはりたまり
先 稍へ 梅を 心の 色 志りり
一書に王仁か程波津にさくやこの花 色志りり
の歌を元まひしことなり

曠野集員外

員外のるまゝ兼ていふりし無りまて物ゝ聖といふ
集の本るまゝハなりて東田明の麓にありて東田
明を東叡山之叡山を田明といふなるまゝハなり
文選天台山の賦に曰登陸則有田明大台

又丈山の覆裳集に田明山上一輪月芝を
則此叡なり田明記曰山之上有自然石窓田
面透明故曰田明 佐川田喜六ハ一書に永井
家の臣下に昌俊と号す山城西野の里に
隠栖すと云々昌俊ハ集外三十六歌仙の一人
にして「吉野山花すゝ此の朝なりしこゝろ
まゝのゝ峯の白雲」とよめりし吉野山の名歌
なりと云々此本歌ハ宗家卿の小倉山志く
なく此の朝なりしきのふハそうすきゝ峯のみ
ち葉といふをそてよむと云々古歌古なり
其是すなはちそれよしをとゝの時ハ二歳の糟粕なり
此境にて大切なりと云々
麦 喰し 厚と 花もへとおきかな
一書に物ゝ時ハ物のすさみにまくうりし

形してさへ人を悪しりてあの此意を気すへし
・虎此物語をきしよ虎に追れてあふ人
・ありて獨色をなす
成美曰小学致知數に程子曰嘗見有被虎傷
人者衆莫不聞其間一人神色獨変問其所以
乃嘗傷人人孰不知然聞之有懼有不懼者
知之有真有不真也
・猿をきゝて実に下る三声の涙
太節曰杜甫秋興之詩䕫府孤城落日斜毎
依北斗望京華聴猿実下三声涙奉使虚随
八月槎
・猿の啼をきゝとをるに長く鳴て
一書に猿の字此書様あやしと云く　愚考猿
之一寸斗に三寸程ありて猿りうらりのいくあを
猿を作る事山海経又見えすよりてあの事類のう
ちみえしき注にて出りすれのに志とありて云
ありのとり又をみされてる形をあれしと云々頭次
と云る夫木集にてのちきれて蟹の山海の猿すら
を雲に上き作るあり角をのまんとしち見るて本篇の
猿形り
・りの静形りれてし米うすき
成美曰楚辞の注に曰以蜜和米麪熬煎し
て是を作り粔籹ともいふ興米とも書
・武士の鷹うつ山もかとに近し
一書に鷹すゑ山といふに是を獲波るのと云々　愚考
鷹すゑ山とらへて鷹見山といふに美なりと知て鷹する
鷹をとすゆ形なりしといふに一聚巣鷹の経驗一聚
山回鵠鷹山鵠行回按鷹三聚白挺徐回

両回蒼鷹四葉両片回又曰雄八兄鷹としいひ
雌鷹を弟鷹といふ又廣志曰一葉黄鷹二葉
粒鷹三葉青鷹

・立かへり松明をきりたるの燭

愚考名物六帖云燕間録曰戴石屏之詩小
夏麹朔克食松明夜尚燈芝之深山之
老松心皆油物如蠟山西人多以代燭頗不
畏風箱根或有鞍一るロなとまて篠牛を
来孫て賣をまたり

・千白いとなむ　小山社　寺

愚考若校口とまたて大原千白の無行脊
僧主を細川玄旨法印之法眼紹巴の宗匠
にて懐紙を鞍弓寺の付抱とする[illegible]心
のほとりや歌に小山社焼り機や咲[illegible]

なるなるに花の鳥のしして

・枕をなむ形く　盗人の妻

一書に樂天の詩に大体四時心總苦然中斷
腸芝秋天白意を明らかに

・柏木の脚気のつくしと

成美曰源氏菊菜ト書の詩ひよりまいい
ひはらひ詩るかくひゆうといふものにあらず
もりしうふみたはりまたる詩ハ和名抄
脚気一名脚病俗に阿之乃介

・うましと無に不破の万伯

成美曰文徳編年集成曰言聖山まて秀法
の扈從不破万伯十八葉人しとまり一日害
時に文禄三年七月十五日

・を淺や浪に忘めされ　蜊充

愚考志めは標なり又帛に水面にさすゝ切
なり是より是まてはて詳分しと演蓋の指分に
を淺は沖まはなれば沖に至りてはて多分入辺
にすなとなるなりとかや燒帛 鏡帛の數とハ
又格別なり我ものといふ義そかし

・秋風に女くなる万の髭男

一書に今昔物語に曰 説孫聖の蓋に被出
往来の人をなやますよし 我光和氏 當し
めさまは貞尼季武等に給ふまはれ女車
乗てさか一まにて今ハ果して盗賊とす来り衣
服を剥充むと立よりけるを東雄郎宮に被
の主所を召捕しとこ

・袖を露ちき 説孫の法 嫡

愚考元亨釈書曰 説孫法嫡 [illegible]

宇釈 是昌の開基 僧都の衣の袖に虚空蔵
菩薩の御かたちなりしをまはれ其の袖を切
てその御安置す

・美しき 鍬うきそり 春此水

一書に古詩に云 備魚浮春水

・柳のうらのかまきりの卵

愚考端埠秋の来に以て末学のうらに登り
つめて子をうみ付りて 慓蛸と書ていふ志りの
子この方きりのすといふその形のあ中しきまはれ
ものや伯父のふくり又ちいのふくりなといふ下学集
に曰 五月の花端埠の子化す則 七十二候の義乱
なり孔子家語曰 虫八ヶ月にして化すと云て九月
より四月とも以上八ヶ月こ

・夕露染 [illegible] てかつるゝむ

愚考するに眠との二字なるを見たる人に　五雑
俎曰朝霞不出市夕霞走千里夕霧は日和
なる事是ハ漁物に出来上りたるを見て勝る人之
云ひきはまる　勝　角　力　とて
愚考　角力ハむかしより神代よりもありしを
人の代となりてハ垂仁天皇秋七月當麻蹶速
と野見宿禰が捔殺しより節会と悪く宿禰
よりのちに日本紀に見ゆ一説には勝方へ元
を比翼とりし是が始なりその起りを知らし
めしけり又ねひろまるといふ也
すまふし　杉の中の木のえし
火鼠の皮の衣をもてかね来て
浜見もし　とうち笑ひ行
方みよりなつかしてぞ後になる

諸注皆曰火鼠の皮衣ハ火浣布之作なる
かくのうへや姫の古事なりと　愚考姫の
二字を竹取物語いでくるはじめの物語のいはれつら
なる事を翫し給ふ玉の枝をさゝへしてさ
らふかつらさゝまし、かぐや姫玉の枝をとりてす
とてやかごとしけて見ければ又此蓬莱を
かされる玉の枝にそ有ける中の一首を右大臣
あべのみむらじかきつわれかひにつやまかなる皮
さらにまかりしハきてたへせてかくや
姫皮をさなんを焼て名残すくなりとその
皮衣ハもひのかにてはえすしを後の二字を
いそのかみの中納言子安貝とるとて落て
腰をうち折るをあけきてかひなすしなる
ものをと侘てしにぬる命なくすくひやハきぬ

愚考源氏葵の巻に六条御息所と引入の大臣の北の方と葵の上と車争ひに仕丁とものゝなからそひなりていとさうさうしき様なりしを見略し平琵琶の撥木を書換たり

六位になりし意のうへ幸さ
代まゐりまて安しと更おもひて
勝一番にのりかへし

愚考伊勢物語の注曰業平朝臣いもの座にかこのたひの使にて下まて都へまゐるまてさひとつより丑三ツ迄なりしにまかうとなりゆくらいあなよりつかりとつ何まても道隆のとりに前句の生されぬ更をかへりみて六位の階なり秋宮ミ仁明帝の皇女恬子内親王也附業平朝臣六位まて其の後貞観四年

位に叙す何すよおくしらんかまよよひるとなり見えのかへりの撰撫なりし実をとは附懐肚首てもりそ逢ゆへに恋のうへ八辛とまて仮逢ふかのこ代参りの附まて其の折先せしとみを高階師尚とりて秋宮腹の高階家なる逢八今にまた京へ叶をりしとなり以上關類抄の器文なりさて勝一番とは合百定なり京よの伊勢へ三十六里往来七日なりて旅用之鐶一昔を旅中の用意なりて雅に譬ふと八昔俳諧之無名に代参とするまて伊勢よりかあし風雅の心座まて一家に心を志して五家七道をおもひめぐらすゆへに百定まて定のりんを定めたる表まて俗談平話の飜案と見えを内心の大腹中なり謀よ妙ならん

駒の発きのみを信濃又ハ甲斐
愚考 駒のこと爾雅曰小馬之事文後集曰馬二
歳曰駒又祢やうらのをて三歳を駒といへと
書り先四季物語曰十三日としのちて甲斐
の駒迎十五日ハ信濃なし今宵九月よめそて
九月しも言る様お前しへくちすの牧の望月の
駒引きて来かきめると云く公事根元曰信濃
望月の駒迎えて往古八月十五日なりし朱雀院
の御時よりかりて迎さ八とて十六日と定
う給ひさまし其の十七日ハ甲斐駒迎と定
されし八十六日ハ定其の十七日ハ甲斐勝ハ八
公事根元によると見えたり
枚の句をし見よ 昔浄瑠璃
愚考 枚亭が物の巻物ニ柿浄瑠璃始りて百
十余年滝野沢角の両検校平家よくハし
く琵琶の妙手なりしより浄瑠璃物語と
いふ双紙を節つけ出して薬師十二神をか
たどりて十二段としてかたり出す是此
三絃にあハする事いまだなく扇を
ひらきたる手に持ち右の手の爪先にて骨と
紙とをうちならして色しの拍子をとる
又都の名人とい一派なり門人東の洞院目
貫屋長三郎といふもの後陽成の帝
叡覧なし有て浄瑠璃太夫に受領なりしかは
されしよりまたしもいまに 安口判官 弓継・證誓 正本因
五輪砕 是を五段の本是といふと時に正徳元
辛卯年初秋吉日竹本筑後掾藤原博教
花押なり是其の略文なり 駒迎 定らざる也八

三弦もなくて只手かうしの一くち弾なり
なるべし
・月に柄をさしそへたるはよきさまなり
風俗文選に元荊口山儒家鐙の月に柄ハいかなる
をりて詮なし　味噌漉けて なくらはんよきさま
なり　愚考許六なり許六なり宗鐙法師の
句なり　愚考許六なり宗鐙法師の
句をいふ心なるやうなり　意味深長にしてをし
なまはハ幾人か服膺すべきなり　志賀直哉万葉に大方
のなめゆく月に網をさし　素大君をまきあげ笠
はまきり更衣集に「夏の夜をひかりすくなくく
すむ月を我ものと鐙とそ見る万葉の
歌に網をさしこしたる笠まもこのかの一しき夫
木集の歌に柄もなくして笠まもなかりしと
発しまるなまて百紫を後撰とし夫木をいひ

活計とする活計と雑まれて詩に曰維北脊升
西柄之揭星に云へ柄のなるものを何そ月にも
柄をさしさるといふなる意なり類きかなる古人の
胸中をさしるるの
・志木柱法ハ一れさしへてよりかなる
・使のものに返すべし　まくす　茅
愚考志木柱をゆかりにまいそハよりみ来まゐり
さまハ此使をゆかりよりそ六帖我妹子こ来
てそよりそこに志木はしらさるむ法ましき
ゆかりとなりハさまハとして此るそ意まれて
なるしこの
・なまはさまと猫の子を撰ぶさまに
・としそなりまてなかうしなり
愚考事林廣記曰試猫從頭撫脊若尾起則

為託若尾順而不収抵腹下則捷又格物論
曰猫捕鼠獸且暮目の星く午時竪まして東の
めし其鼻端を冷唯夜至一日暖之
・花の賀にはらへかはらり流蔵つ
一書曰多田満仲の四男美丈丸を仲光我子幸
壽丸に首を切て身代とす此美丈丸の四十九
賀の折から仲光かはらへなみしなるへしと云く
愚考花の賀源氏細流仁明天皇嘉祥二年奥福
寺大法師年賀天皇満四十是始之正月より六月
まて江生きたるもの花の賀を祝ふ七月より
十二月まてに生きたるもの人を和義の賀を祝ふ
・新合独古 謙首 まゐる ら なく
太節曰井堙抄曰寂蓮顕昭を毎日参りていさ
うひなりなり顕昭を重まして独古を持たり

そう寂蓮を謙首もしさけてしさのひなり夜中の
女房例のとつこの事くひと名付たり是を
見大将家に六百番新合の時のなり
・まし献立の皆ちのひ なり
愚考本朝語園に或席まて頃阿六首の新を
花て和用皆の侍小柳の下に押入て並所出さ
なかに雙雲か六首を花たる新に皆元聲て
並そかに既に続尺来る所く頃阿かつり来て
見まハ悉以前の新まて名なれは是侍墨押
すりてさらしと書て出しぬその新の冥しき
をまて皆感しぬと云く雙雲を雙運かなる
なるに諸書に皆運の字を 枝来隠逸傳と云
矣なりその新皆勝に成たりと云く此つに此
傳を新を引聲て尚或させむとなりしに

てまた此題に見えぬかゆへに苴の字をハ
書り苴までこのらむしと訓す羽別より出る
を上に示すまはハ苴をもて比越の縮をた
むまるなり

・むろしと小詰の宿の屋時分
・みれ 同 青 に おうす 意仏
・百万もしらひ 所を 花れ たる
愚考 或ものに七条河原より夕立れして
雷むろしなりしるの柳原河原坂の不とり
まてさしの所にむひきしく嶋と云て
雷れなりたしめくをこのすしき時の神さ
のみといふ出しく同 青 にあり意仏と小詰の
宿まで尚國追分より三里なまり善光なへ
来詣れ同者なりと見えたりさしてさの

意仏を説詠の大意仏と云なして百万が狂ひ
所といふまで小詰の打越をのの進む料に和な
まさしなる意仏なるを寛まてまで三月十三日
大意仏永延三年 奮然始て行ふといふるまに
ハ与奪なり百万といふ者一子をまたはなて
狂ひ出が清原なるまてめくりなひまたるなり
花に様の附と論するに及ちまた

屋々は静にきけハのらひよゆ
酒えひなりしに出のさろれ月

詰注ともこのらひまたる葬とすらまで非に秀の
のらひまたしむまて来秋よりの題なり此自まで
深る屋のこの方ひすしき様に服もその心を
始て酒えひなりしにまで仲秋十日前の時なり
良夜をむりしにこへまはハえひ習しに出の

ちらり九月なりさて又一句を吟し味ひて
まゐよくしきけれからひすやとハいひ
うたし古歌にひたすらに我名をなけれた
のまさくこりしとれみ噂わるかな仮和に
おゆるさ升てハ小青れ蒙うなまとよく
しきけれ三月ひすや喧又囂又嘈ーとも
書て舜の乱まゝる形之神原のるまハ
めにくしくたのひよりし意をひてきけれ
こりしとのみなくとのて成れとこしまし
舜之といふ意なりカマヒスシカラヒスシラ
とマと通音之弟一によりしきけハこらひ
すやまてハ一句なえによくしきけハからひ
まりともいたくさもなりなむ何まし神原
なまハからひまるまて誤なり

瓢簞の大きさ五石はこのりく
成美曰荘子に我種々成而実大五石さま
利をはなまはなれ見込なり
ゆくにあるのまして、のつまふ市人
何なりまも安まハ名利の地
愚考家にてハその瓢を許由か伊に奪ひ
まるゝ箕山にうくれまをもて水をのむを
人のなれまみて瓢を縮りそる呑ほして
木の枝にかけておくに他の吹まひに喜の
するをこしかりしとて折捨てそり又堯帝
の勅するすをうまふさしと耳のそゝのまをなら
らふかとの隠者なるまハ次のもあを名利の
地と三句に許由か伊をそすこの古詩曰長
安古来名利地空手無金行路難

成美日白氏文集帝都名利場鶏鳴至安居又終夜清京弟笑歌不知疲也安名利地此與幾人知

・きぬしやなかりかなそしなてやかれ
・空引 ゑまゐ人 奉のうはくし
・手ゑ法かれ 君の御脇もす 無り来ぬ

一書れうはれ 拘りしかりに 御ひきまひて むと 嫁しまひぬ 愚考源氏 葵の巻に紫の上十四果此君は上もるまに此方なりとて色の宮上に紫とは中まるこれ 又そのうへになてやかれ 又ゑ一人 後朝ものをはかしうれ不して起きまいれ 君もうちくしまひてその夜祈れ子の餅をいたひまふ 笑らの伴なり

・人去ていまし此度のあふひかり

一本に法度の白ひとするハ非之オマシ之荀彧といふ人度なり 其氣なり 其人去て後三月れ 日当ふて来うまれ故に荀令まいと称す又次の氣のなるく亮中とする 是も非之氣の義なり 亮中之歩り亮中と云ふ亮中をなしかし

・なやまくに 故に 妹か 夕なこの光
・なの雲は 詩なみ 法く むそ
・切月のうハの空まて 消さしに 可

愚考源氏夕顔の巻にいとこのよいく 君も空をのみ見 法るものをいとなしとれなて愚案病者の空をまゐるの死相なり 東鑑に曰 姫君 猶令疲労給 自去上二日以目上瞳御(ヤマ)此る事 雖凶相之由 医師時長警中之旅 今者亦其特 欲凡匪人力之所也さ 遠ハ 出て 涙の時なり 又東方朔傳曰 黄雲

熟青雲致虫白雲致喪黒雲多多赤
雲主有火其二日とするに必死の姿に扱又
夕散の上をはれて其のきはまふ時乃散
山の端の心もたらて行月のうハ北空に
てかけやまえるむ此散うをまふへきの
花表ありや河原院にてむるしくなりまふ
又沖の鞍に居賊の台も夕散の上をするに
のをまひ分る侍にして其をうしろ侍にし
て云へてを夕散の上の侍四分なりさの二
三分の注釈諸注にいろしなきとよみる憶
説にして無益なるまハ祇墨の費をいとふて
畧し早さて又なやにくといふ祖をいろしの
義理有といへとも皆はこのひなやまきる之
変にて其はよくといふ祖之源氏作川の巻に

いとしこうふなやにて心をそひまるすむ其を
書しまくきといふ意なり推本の巻にを
なやにくにさしくる日かけまたゆくて其則
強といふ義なり我伝濃にて其折りるくと
いふとらしにはりふ
・蔵其に蔵の兮この文や天津屋
愚考天子上林に出て屋を射まふ是に帛
書なり漢書蘇武傳の畧なり又古今集
に秋風に初屋この手を守ゆなる詩五はさ
をかけて来はらむ
・恨まる洞まふ之にとしまりて
・静は前に辞をすむる
一書曰静は前この首くら一捕をまして義理の
ゆく湯をかきはねらまきるに なやしくのみ

以菩をまうすけれは朝公の位にのまれ欲
舞に名高き女なるまいとて以不足なりされ
た舞の影に志つやたけ志所のをこまきに
くりかへしむりしをいかなるすよしもこのなる
芸義強をたゝふのさしまして公よろこひ
あはれとなるむ許六万謙倉の織にも神前の
舞臺にて靜か舞のと仮まり曰吉聖にも
舞を好みたるとハ意別なり
・空禪の離魂の於れたるしき
咸美曰本草綱目人参條下に有人卧則見方
分有身一様無別但不語蓋人卧則魂帰于
肝此由肝虚邪襲魂不帰舎病名離魂
然れいこ法きの上略まて生法きとよむ
なり愚案カケれ病れ一人れこけ一人ハ其

人両人とも行住度外後にその点偽
をかまるのなこれとなり
・詞なりけり　金二万両
・いとをしきこ子を他人とも名付なり
一書に京室町に宗甫といふものの家子れ
なきを見限り二人の男子を勘当して
家財家義を賣代なし二万両れ金を懐
にして生涯気志の困窮をたすけそると
なり此侍ものやなるむを世畸人傳に出たり
・やけとなりしてなりしたらきこ
無味堂曰楚國に一人の孝子なり或時なりや
ともちて母の敵を火に屋くその罪を悔
て自分と郡主へ訴へ出たりその母れいに
やう芸れ我子にてなりけれとも切にあり

鞍なりしとこ附言ひらかなり

・そめいろの不是は浅黄に杖のくまき

一書に蘇迷盧山は須弥山れるなり西城記曰在大海中 攄金輪上日月所回迫影に北八黄に南は青く東白西呉藍にそめいろの山そきをそめいろの道士と引直しまり

・花とさしまる 学れ一 解

一書に学花をもて花にうつる是杖の正花となさしなり

・傳既をうれしさ紙に包みたる

愚考事物紀原曰諒葛亮始製之為祚供又何やらに塩漱家の傳に建仁寺の僧說山禅師元に入て林淨因といふものを才子に付此淨因よく傳既を製す說山

段朝の時淨因も来朝し後に氏を塩漱と改め南都に住居すと云て

・西王母 東方朔も同まれて見れば

一書に平家物語に曰滝口のいふ西王母といひし人も昔はなりて今はなし東方朔と申しものも名をのみ守て同まれ見れば

・よしや鬱鬱の舌れみしかき

愚考曲礼曰鬱鬱よくものいへとも飛鳥をたるまゝに虚に虚の對なり

ひくなりやうて 伊勢の八朔

一書に後のひくなのるにいひたるなり

愚考後のひくなれば九月朔なる伊勢に豆雛といふものなりて今は不所に児童の歌ひこす古し一秋宮の雛饋八月朔なるに唱といふ

説なり人形をも垂仁天皇八年殉ぬ宿禰
始て造るなりまゝハ時代もこのなりけり一き八節を
俗に田の面の苗といふ此日西収を祝ふ也人に
田の実とよもいへり

・満月に不改 擬をなこのめ也
愚考 雖を世上にて常時三月はかりなる
を伊勢にてハ豆 雛なりまゝとも不改の数ひ
とする擬とても志先ぬく不改に詠ふといふ
義なるへし此時節自に満月の擬と名ぬ
やうなりそこの名人の云おいしまて則八節に
居て満月の未来の楽をおもひ斗まて詠
めたるやと上手に伝りまゝるものゝ一説に満月に
擬をも花とさしまゝるの補ひなりといふ実
にてハさもなくむよしや補ひたるとも物の種

のなる花火餅花も西花なり必補ふといふ法
を取りたむ此時に月をのこさまゝぬ次なり
前の月二ツなりし短句なりよて去句此月
府なりまゝハさて出し法まゝ

・念者法師をなきの杖かを
・夕まくれ又うらめしき紙子夜雨
愚考 不改擬といふに法けて念者の意
を附たるを又おもしろきを迫なり平生の
意なりまゝハ不改といふ文字に何ことに扱ふて
又うらめしきと気俗の夕まくれおとこひ
をとくにそこをたり

・むしろ安一き喚 續 此なる
一書に世るまて尾張国よひ法きの演に
よせたるを基数やすまて芝を書礼考乃

役に莚を変てその家の子従者なるを先
次第をかちて喚續して居とむかるを伊勢
に有然しいはくにても家中独礼悪れとも
にその名をよひ居くなり愚案花の兵に
なさはき脇を年所にまた卿はくましきか
莚変つきの祠にても志る一し尾張に喚續
を後呼續に改め又呼姫に改まり今は霄
月の里といふ祖翁星傍れ得書に雪月ハ
夜ゆてからと曰ふは則是なりと呼傍れ
手代倉某よりそ請玉剣和漢三才品絵に
もあらゆ

・なりしし 新酒は人のさめ安き
・秋うそ寒しいはくも湯きらひ

愚考博物志曰人中酒不解治之以湯自漬
則愈湯亦作酒気味也又俗草紙に曰誦文
歌二首の夜行の歌「あたらしもやはらせくらに
ふめる酒手酔是酔わまはしひにより沐浴
の歌月ひの縁はるさるさきに湯なひよと
みくはるなくにいひてしものを雪云究
う盛まい新酒はさめ安きまは八塗なし挨
投に云 新酒は酒ゆへ志たらか呑ましし
是より上は無理て居る酔直してもも
湯に入るうきらひ雖に林無く凡てもも
引てもなるゝめと一旬の十日文字に基源
の咄のなるを凡恵の及ぶ所にならば我人
は雖に博識只その作者の数量を計里
て解す無し才三書を引ちらす中に酔
らしたる形容又なるべしもれもしらば

・に面薬此筆わけにゆく
愚考此ハ病体にして世るに沙汰するハ
非なり只酩酊の酒に酔ひしまゝハ酒さやし
の薬をとりにゆくにか郎の診察のと
きまりても実論之和歌色葉抄にかに面を皆
面ともに聖ともに書て家の後之見又筆主の
按披之

・疱瘡 新の遺と謂るかし歯の白き
愚考是ハ古より凶日聖武天皇天平年
中筑紫此人新羅に渡海して漂泊の折
うつらうつら来る時に泰澄和尚法を修し
て謝息せしなりと云く此病の甚しき醍醐帝
後光明帝疱瘡にて崩御ありとかや又痲疹
ハ万寿二年始てはやりとなり其にハ懐
妊のものハ治するなりがたきとりいふ事

・明日ハ数なる 霄此月かけ

・あらたのの むまれて治者なる女 あり
愚考見るに抑此の侍なりといふとも数多
くしてかとも定めかたし 嵐雪か医師の名
まで死去の姿れ僻するゆゑかくも定から
ぬなり 余此抑此の侍ハいらつもの名なき
ともに源氏ハかの侍いはせものかたりハかの
侍と昔三なの役者まてあるハ定まり
ち二なの侍源職蔵董の侍往者もの名あり
の中納言継娘の侍大和抑此の式部らか侍
なれんうこきて実まてハ只平生のことなと
あるをしまそりしなむ

・よみてあるともかをといふらむ

宗因やらの事ハ人ハ毛ヲ三節をもらいて
呼子等甚角ヲ有やらん猿ゑらを狙ひし
て杖けよめて等彼笠の論皆無益なり
・砂雪やまとしのぼる桐の木ハ
無味堂曰古詩ハ曰三寸白雪降梧桐云々
・なら出とし　出捷乃　萩
一書に無名抄曰陸奥守為仲任果ての不足
なる時宗媒聖の萩を取りて出捷十二合ハ入
持てのあり云ま八人所分ねく皆て京一入
そう日ハ二条大路ハ笠を見物して人多
くなつまり車ゑとまなまして立たり云ま宗
なるを押合ハ月といふハ便り後の事を西
司の人見るとゝうけるしなる
・何事を泣そむ聲をつりおれひ

・見ましものまいはぬ法まゝ事き
愚考大和ものかたりに磁瑚の作所と一のや
に息所事の所曹子の前わたりを抱狂くし
き女のこのけあるきそるを帝姿やしみと
ふめさせ事つまとよものよ得いはせつりそまハ
出忠朝臣思ひてらむ心のうちをえらねとも
泣をまゝる出そけひしかりそまき
・柳ちるかと　例の莚　臣
一書に莚臣を郭の下之足通りて探干のぬくり
るものなるをも云又ハ王令陽葉の臣節に莚を
爰或ハ布をしたへ或ハ爰衣なとする皆莚臣
の使をうけ事ハ有ゑ扉下侍ひの莚臣と
・寂しき秋を女夫居そり
愚考私に配するを女夫と云皆を調へ媒

なるを夫婦といふ
・其一日にくらかり峠まで伊賀と河内の境なり云々
一書にくらかり峠まで伊賀と河内の境なり云々
・さきこ草や正木を引に誘ふらむ
一書にさきこくさきを接なり正木を別本にして
上より自の無りしるをまさと云此度をおへ
も篇かりさきくきの下略　一書にさきくさ正
木とも和歌の上にて傳あるものなり幸草
接に又鷺草蒙稜に誘説なり下略　一書に
延喜式村稜と書紫草日本紀私記に曰福
草和名抄云草枝々相値葉て相當也　愚考
さきこくさ稜に正多きれとも此るを募を
枝葉まきまき草に接の説を然らば可け樋の
先の瓶洲る朝炭賣の妻や子とものさきひ

合て拈草や法る正木を引に伊く傍に拈や
正木を引に行とも非なり引とも根さきに
引まふす義なり
・何るかよのなり合てをうち笑ひ
・恰とり　を　みな　女中なり
・浦漁に　脛　吹まくり月深し
愚考抱かしりの傳といふを此云々と只今とも
を物のもの語の詩る傳とその人のすゝ詠行此
るとに押あてしる傳と見を只すらしとものの
かしりの初を充て附なしるものに深き明
石の巻のうち君を抱むすしをひておかしし
めくとすにいと心なれとし月さし出て
汐のちかく所ち来る語もなりまに余波なれ
よせかへる浪なりきを柴の戸押明てなりめ

おもしまず近きせらいにもの心をしり来し
りて初先のるす寺見えとやうとしたのしゝ
さしる人もあるし あやしき海士とるもの高き
人おハ出る所にて なつまりまゐりて空も志
ゆのハぬるまとも をさへ作り あるよいとめつ
らしのあるまゝ此さへ作りなるといふ詞海士とも
月のさし出てと三ツの月を見て三ツとも
とりなる中人も空てよろしきむむ作りしと
おもしむ人も接よおもしふるをいそぬ もうつり
てたらふるゝ わきるまゝハかりにしるしつあて
かなかのこむるなるのるまゝなくしのくなれ
らかにありうかつそやつりまゝ本上なり
・見るもしこき紀伊の作魂歌
愚考和漢三才象言に曰紀別名学頭演

中村長保寺天台宗にて寺領二百石紀別
家の雲掟なにして教宣公の作魂歌なるを
寛文十一年薨す南原院殿と号すと云
・若君のさし矣対て居花の作
愚考武用弁略に曰寛文七年の春紀別の
大寺家臣五人に命して手対をなさしむ所偶
葛西源五左衛門葛西筆左衛門徳田甚太郎吉田才
右衛門岩橋半太郎各九分余の通し矣を始る
と云て筆をとりし始めて大夫数まゝなるに小夫
数なり大夫数ハ前日の当方より明るの当
方に始る尾陽是整勘左衛門八千筋対ると
云々傳に曰筆を則本附なり前よりの作に
附て仰くをうしろ附と云古る物なりの
附に心を作りて合点す画し

秤に　くまに　人し　れ　典

愚考秤は斤両を画すものゆへ北越まで云

斤両といふ又ちきり杜秤略してちきといふ

此ゆ様入居れ室のけるなるに

愚考挟衣に曰入居の家は説係宮ノ北姫

家にて深く仏れ居に入らをまい説係に

すらまさをまいらるを挟衣の大将より深く

意志さんをまいられとよひさはらにものうく

お自しめさまして人にさらしなひまふるを

と悔いきまふなり和るのそしきをみさして

後自にその侍をいひかすりそるものそうし